

第5章 加納地域のまちづくりと和傘産業

1. 加納と岐阜の歴史

岐阜や加納の歴史について、松尾一氏と松田之利先生のお二人にお話を伺った。

〔1〕岐阜と加納の歴史（松尾 一氏：地域史家）

〔古代〕岐阜にも縄文・弥生時代の遺跡はある。古墳も残っている。

豪族は守り神をまつり、神社をつくった。岐阜には、伊奈波神社・金神社・檀森神社という大きな神社がある。伊奈波神社は、景行天皇（第 11 代）の兄であるイニシキイリヒコノミコトを祭ったもの。金神社には、物部氏の娘であるヌノシヒメノミコトが祭られており、伊奈波神社と婚姻関係がある。檀森神社にはその二人の子、イチハヤノミコトがまつられている。婚姻関係でこの地を治めていったのがわかる。境川で大和勢力と反大和勢力が分かれていた。北が反大和勢力であり、反大和＝比奈を守る為の比奈守神社が加納の南にある。

松尾さんは「伝承はおもしろい」と、古代の話のほかに、稲葉山や金華山の名前の由来の話もしてくださった。

大化の改新で、「東山道」というブロックができた。また、国司がおかれるようになり、美濃には都に近いほうが便利であり洪水がないところということで垂井におかれた。東山道という道もできた。このころ、条里制がしかれ、今でも六条など名前に名残がある。また、黒野のほうに市場もあった。

条里制が崩れていくのは、荘園の誕生である。功績のあった貴族やお寺に与えた土地が荘園である。荘園には国の権限がない。今の茜部に、茜部の荘と言う東大寺の荘園があった。荘園の管理者は、荒地を開墾し、国に秘密で勝手に自分の土地にし、年貢を手に入れていた。しかし、隣の荘園との境にぶつかると、きちんとした権限がほしいため、開墾した土地を自分のものとして正式に届け出て、国に年貢の一部を納めた。このように、もとの荘園に後で加えて納めたことから「加納」という地名ができた。

〔中世〕先の時代で、荘園を管理する為、武装した勢力は、藤原氏の時代に地方で活躍した。源氏の子孫が、鶺鴒あたりに土着に、勢力を拡大、「土岐」という氏に改めた。土岐氏は、足利尊氏の見方をしていたため、室町時代に美濃の守護職についた。このころ、今の加納の南東あたりに、川手城という館ができた。部下も、舟田城・加納城をつくった。室町時代の都以外の3大都市に、山口・鎌倉といっしょに川手があげられたほどであった。川手の正法寺には偉い方もみえ、大変なおもてなしをしたそうだ。

時代は変わり、土岐氏は斎藤氏にのっとられる。斎藤道三は、金華地区あたりに、城下町らしきものを築いた。

その後、信長の時代に入る。信長は、稲葉城下を「井の口」から「岐阜」という名前に改めた。戦国大名がこのように地名を変えるのはめずらしいことである。岐阜は中国の岐山という地名からとったと言われる。「岐」は分かれる、「阜」は丘という意味をもち、金華山のふもとで長良川の流れが分かれていたことも関係しているのではないかと。当時、「信長」と「岐阜」は全国に知れ渡った。御園・中川原に楽市楽座を開いた。

〔近世〕江戸時代、岐阜は20年ほど幕府の直轄地であったが、その後は尾張藩になった。

慶長5年、加納城が家康によって造られ、奥平氏の手に移った。奥平氏は自分で城をつく

らず、もらえた為、ラッキーと言えよう。加納城は、慶長15年の名古屋城完成で価値がさがってしまう。

家康は、征夷大將軍になる慶長8年の前、慶長7年に中山道の整備を始めた。慶長9年に1里塚ができ、加納は30年ほどかかって「宿」となった。町人だけで3200人いたと言われており、武士とその家臣の人数を足すと、多くの人がいたまちということがわかる。

江戸時代後期、加納は和傘産業が発展していった。発祥は定かでないが、美濃和紙や竹などの材料が揃っていたことから始まったのであろう。傘は、岐阜商人によって販売され、傘札もあった。

〔近代〕明治、大垣にいくはずだった県庁が岐阜町にきた。交通が、水路から鉄道、陸路にシフトしていった。岐阜町は南へ拡大していき、柳ヶ瀬に遊郭ができていく。柳ヶ瀬は、徹明に鉄道が集まっており、交通アクセスがよかったことから栄えていった。代わりに江戸の華であった伊奈波通りが廃れていった。

加納も廃れて桑畑になっていったが、和傘で復活した。また、加納はこのころ文教地区であった。大正15年にイスパニア風の加納町役場が完成し、岐阜市の役場をライバル視していたこともあった。このころ、岐阜では区画整理が行われ、下水道普及率はすごかったそうだ。

昭和に入り、加納は岐阜市と合併した。その前から、加納の住民は名刺に「岐阜市 外 加納町 〇〇町 ~」と書いていたそうである。郡（稲葉郡）より通りがいいかららしい。しかし、周辺と合併して「加納市」という構想もあったようである。

昭和に加納の和傘が衰退していく。そして、和傘産業の分業活かして、問屋街が出現した。しかしその問屋街も今や衰退に向かっている。

最後に、これからの岐阜はどうあってほしいか話された。

- ・遊べるまち 居酒屋など
- ・生涯学習のまち アクティブG・大学のサテライトキャンパス
- ・生活中心型 ペットタウンでもいい

主役は自分たちである。理論ある実地をとということであった。

（2）松田 之利先生（地域科学部・日本史）

『岐阜市史』の加納のところを執筆なさっており、また加納城の復元のプロジェクトに参加されていたことから、加納についてお考えになっていることを話していただいた。

加納城の復元プロジェクトについて。このプロジェクトは 15～6年前に組まれた。計画内容は、石垣の修復・城跡に構造物の建築・堀に水を入れるといったもので、大手門（岐阜大学付属小学校北西の歩道橋）のあたりからの大規模な整備が考えられていたそうである。しかし、付属小学校・中学校の移転がされなかったこと、石垣の修復が困難なこと（一部を直すとアンバランスが生じる、すべてを積みなおすのは予算的に厳しい）、などの行き詰まりが生じ、プロジェクトは幕締め・消滅となった。堀の発掘調査は行なわれたが、先生的には魅力的なものは出てこなかったそうだ。

現在、「すみやぐら」の復元という話も一部住民から挙がっていることについては、この時代だから費用的に厳しい、市民の間で賛否がわれてしまうといった意見を頂いた。

「加納」というまちについて、岐阜町との関係をふまえつつ話していただいた。

加納は城下町であるが城下町とは言い切れない。もともとは、交通の要所・幕府の直轄という「宿」であり、荷物運搬・馬などの提供を行っていた宿駅に城下町がくっついてできた。つまり、加納は、幕府の直轄地である宿場と、加納城を中心とする宿場町という二重支配を受けたまちだったのだ。

城下町は商業中心のまちと言われるが、加納には岐阜町があったため、あれ以上大きくなれなかった。また同じように岐阜町は、江戸時代に流通の中心が中山道にうつってしまい街道から外れてしまったため経済の中心になれなかったし、あれ以上大きくなれなかった。つまり、加納と岐阜はお互いに依存関係にあり、また対立関係でもあった。両者には機能分化がある。

歴史的な町並みとまちづくりについての話も聞いた。

歴史的資源と言ったときに、まず「寺」などがあがる。由緒ある所・名所は、江戸時代から現代までずっともてはやされてきた。つまり、一点豪華主義だったのだ。しかし、白川郷を考えると、そうではないことがわかる。どの家がいいというわけではなく、集落そのものが遺産であり、町並み全体が重視されている。

町並み・街道など、ある地域を歴史的保存するというのが最近の新しい動きである。有名でなくても、普段着のまちを見せるのがよい。まちおこしは、まちそのものの姿をどう魅力ある形に見せるか、住んでいる人がどう愛着をもつかである。

加納城の復元をしたとして、果たして住民はそれを誇りに思うのであろうか。造っても、始めは人が来るが、リピーターは来ないであろう。リピーターが来られる、住民らが住んでいていいなあと思えるところにするのが大事である。それに歴史的遺産がどう役立つのか。私たちは、こうだったら魅力的だという観点から考えてみるのが大切である。

（２）統計から見た加納地区

人口の比較

人口は戦争期を除き昭和 35 年まで増え続け、加納東は昭和 35 年の 16,430 人、西は昭和 40 年の 15,982 人、旧加納町全体では昭和 40 年の 32,311 人をピークに人口、世帯数とも減少し続けて現在に至っている。平成 12 年現在でピーク時の半分近くの 17,014 人まで減少。昭和 40 年までは加納東の方が多いが、その後は西の方が多い。また面積は変わらないので、人口が減った分人口密度も減少している。

産業別 15 歳以上就業者数

就業者数はこの 5 年間で減少している。これは人口が減少しているので想像可。その中でも「建設業（東西で 733 人→670 人）」、「製造業（2,840 人→2,138 人）」において顕著である。加納東は全ての項目において横這いか減少、西では「鉱業」、「運輸」、「通信業」、「不動産業」、「サービス業」において若干上昇が見られるが、「製造業」の減少が大きく全体ではかなりの減少になっている。

世帯の種類・世帯人員別世帯数及び世帯人員

先に見たように、世帯数は一貫して減少している。しかしその中でも「世帯人員 1 人（東西で 1,398 世帯→1,515 人）」、「同 2 人（1,613 人→1,657 人）」が増加している。核家族化の進行、+ 子供が出て行ったり、老夫婦の 1 人がなくなったりしていることが想像できる。1 世帯あたりの人員数も減少している（東 3.08 人→2.95 人、西 3.00 人→2.78 人）。

住宅の種類・住宅の所有の関係別一戸世帯数

住宅数は減少していて（東西で 6,610 戸→6,207 戸）、加納西の「間借り」と「住宅以外に住む一般世帯」のみ若干増加している。「持ち家」が減っている（東西で 4,078 戸→3,963 戸）ので、家の数自体が減っていることが分かる。どの項目も一様に減っているので、居住形態が大きく変化したとはいえない。

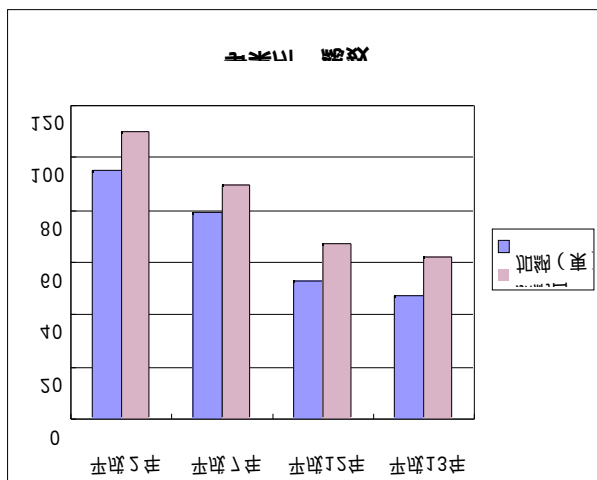
旧加納町及び周辺部の人口推移

先に見たように昭和 60 年～平成 2 年にかけて旧加納町ではずっと減少している（22,727 人→17,014 人）が、周辺部（茜部、厚見、三里、市橋、日置江／厚見では若干減少）では増加（50,254 人→52,864 人）している。それは、周辺部に団地やロードサイドショップが建った事などが考えられる。データを見る限りでは今後もこの傾向は続くと思われる。

小括

旧加納町は、昭和中期までは人口も多く、繁栄していたと考えられるが、現在では人口は約半分になるなど衰退し、活気がないように思われる。駅や商業施設、教育機関が近くにあり、住むのには不自由しないと思われるのに、なぜ衰退しているのが不思議であった。データを見て想像できることは、今後も衰退傾向が続くと思われるので、衰退を食い止める政策や核となる施設などが必要だと思う。

加納地区の事業所数について（H2、7、12、13年度 工業統計より）



* 総数をみてみると

- ・年々減ってきている。
- ・全体的に見て、加納西の方が東より事業所数が多い。

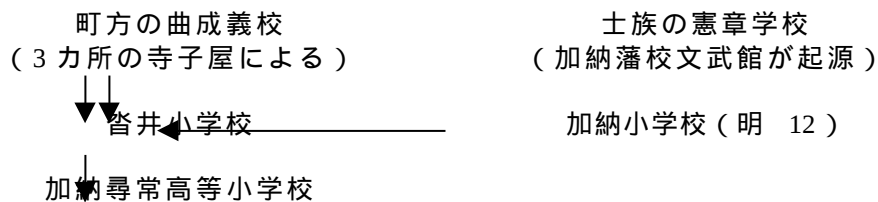
* 業種別にみてみると...

- ・「衣服・その他の繊維製品」が一番多く、全体の半分以上を占めていた。岐阜市がアパレルの産地であり、駅前の問屋街に近いと思われる。

- ・衣服類の次に「出版・印刷・同関連品」「食料品」「一般機械機器」の順に多い。
- ・ほとんどの業種について加納西のほうが多いが、「繊維工業製品」「出版・印刷・同関連品」「金属製品」「その他製品」については、加納東のほうが多い。
- ・「石油・石炭製品」や「ゴム製品」などの重化学工業の事業所は少ないか、若しくはない。
- ・工業が盛んな地域とは言えない。
- ・岐阜市の他の地区と比べて事業所数は平均的。

(3) 加納の学校の歴史

明 5 学制



明 32 岐阜師範学校・岐阜師範学校附属小学校移入

明 44 岐阜県女子師範学校開校

女子教育拡充のため

大 5 岐阜県加納高等女学校、女子師範学校に併設

昭 3 岐阜県岐阜第二中学校開校

昭 22 加納中開校

昭 23 岐阜県加納高等女学校と岐阜県岐阜第二中学校が統合され岐阜県立加納高等学校となる(合併の橋渡しとして 1 年だけ併設中学校があった)

昭 26 加納中の跡地に岐阜大学附属中学校開校

昭 27 同所に岐阜大学附属小学校開校

岐阜県立加納高等学校の歴史

年号	高女の歩み	二中の歩み	一般事項
1916 大 5	岐阜県立加納高等女学校、女子師範学校に併設 第 1 回生 50 名入学		
1918 大 7	校舎 1 棟完成		シベリア出兵 米騒動
1920 大 9	第 1 回卒業旅行举行		日本初のメーデー
1921 大 10	定員 2 クラス 100 名に		原首相暗殺
1923 大 12	岐阜県加納高等女学校と 改称		関東大震災 虎の門事件
1925 大 14	制服としてウエストベル		治安維持法公布

ト付き紺襟セーラー服を
採用

普通選挙法公布

1928 昭 3		文部省、告示 67 号により 設置許可 岐阜県岐阜第二中学校、 岐阜県女子師範学校附属 代用加納尋常高等小学校 の校舎を仮校舎として開 校 第 1 回生 150 名入学	日本初の普通選挙 済南事件 張作霖爆殺事件 パリ不戦条約調印
1929 昭 4		稲葉郡加納町下加納字梶 川（現、加納南陽町）に 新校舎完成、移籍	世界恐慌
1930 昭 5	創立 15 周年記念祝賀会挙 行		ロンドン海軍軍縮 条約調印
1932 昭 7	校訓（敬愛信）制定		上海事変 5.15 事件
1938 昭 13	夏期休暇中集団勤労作業 実施		国家総動員法公布
1939 昭 14		夏期休暇を廃し、心身鍛 練期間と改称	ノモンハン事件
1942 昭 17	秋頃からスカートに代わ ってモンペ着用となる		ミッドウェー海戦
1943 昭 18	岐高女と総合選抜制入試 実施 県下初の女子勤労挺身隊 結成	岐中との総合選抜制入試 実施 夏期心身鍛錬期間、各務 原の陸軍航空廠へ勤労奉 仕	ガダルカナル撤退 大東亜会議開催
1944 昭 19	川崎航空機の学校工場と なる	学徒動員、5 年生は各務 原陸軍航空廠、4 年生は 金華機械株式会社、3 年 以下は勤労奉仕	サイパン陥落 本土襲撃本格化
1945 昭 20	岐阜空襲により校舎消失 加納小学校と鰐喰小学校 の一部を借りて授業再開	川崎動員解除	広島・長崎に原爆 ポツダム宣言受諾 連合軍進駐
1947 昭 22	新学制実施、岐阜県加納 高等女学校併設中学校を 設置	新学制実施、岐阜県岐阜 第二中学校併設中学校を 設置	教育基本法・学校 教育法・労働基準 法・独占禁止法
1948 昭 23	新校舎、鰐喰学校敷地内 に完成 新制の岐阜県立加納女子 高等学校に昇格、併設中 学校設置 岐阜第二高等学校と統 合、岐阜県立加納高等学 校となる	新制の岐阜県立岐阜第二 高等学校に昇格、併設中 学校設置 加納高等女学校と統合、 岐阜県立加納高等学校と なる	昭和電工疑獄事件 極東国際軍事裁判 判決 経済安定 9 原則

年号	加納高校の歩み	一般事項
	加納女子高等学校の生徒移転	
1949 昭 24	東海北陸実験校に指定される 商業科設置 新学区制実施により、多数の生徒が転出、転入 全校 が男女混合クラスとなる	ドッジ＝ライン シャウブ勧告
1952 昭 27	音楽科設置	メーデー事件 保安隊設置
1957 昭 32	全県 2 区の大学区制実施による入学生入学	南極観測開始
1960 昭 35	拡大 PTA 委員会、女子校化問題につき対策を協議 校歌制定 二期制開始	日米 新安 保条 約成 立 カラ ーテ レビ 放送 開始
1963 昭 37	美術科設置 生徒急増対策として、控室改造、普通科 2 教室を増設	ケネ ディ 大統 領暗 殺
1964 昭 39	オリンピック東京大会開会式テレビ視聴の為午後放課	OECD 加盟 東京オリンピック
1965 昭 40	秋季国体の為休業（ 10/24 ～ 29 ）	日韓基本条約調印 佐藤首相沖縄訪問
1966 昭 41	創立 50 周年記念式典	国民 祝日 法改 正公 布 人口 1 億人突破
1970 昭 45	万国博覧会全校で見学	万博 開催 よ ど号 ハイジャック事件
1974 昭 49	学校群制度化による 1 年生が入学	連続企業爆破事件 田中金脈批判
1979 昭 54	午後、初の共通一次試験の為休業	東京サミット
1983 昭 58	生徒による国旗掲揚を開始	大韓航空爆撃事件
1984 昭 59	2 年生での文理コース分け実施	「かい人 21 面相」 脅迫事件
1988 昭 63	ぎふ中部未来博見学	青函トンネル・瀬 戸大橋開通
1994 平 6	校訓・白梅精神「 ^{ゆめ} 理想、英智、友愛」制定	大江 健三 郎 ノーベ ル文学賞

(4) 岐阜市加納東自治会連合会の活動(村瀬幸雄連合会長)

現在、加納東町内会には約 2500 世帯、8500 名くらいの住民が加入しており、加入していない世帯もあるがほんの数世帯で、ほとんどの世帯が加入している。

町内会は、68 町内、15 支部に分かれ、各行事に取り組んでいる。加納東では、年間を通して祭りなどの行事が多く、季節に合わせて各行事が行われる。

その行事とは、7 月に、蛸祭り、灯籠祭り、8 月には、盆踊り、秋になって、9 月に敬老会、10 月に、体育祭、文化祭、中山道ふるさと祭り、があり、年が明けると成人式、といった感じである。

しかし、それぞれの行事にそれぞれ苦労や不安があるという。例えば、蛸祭りでは蛸を育てるのに、お金や手間がけっこうかかること。灯籠祭りでは、灯籠を流すための橋を架けることでの法的な問題や、灯籠を流した後の後片付けが大変であること。盆踊りや体育祭、文化祭では、高校生を中心に、若者の参加が減少したり、体育祭だけに関していえば、支部によって人数が違うので、どうしても人数の多いところが勝ってしまって不公平だということなど、資金が大幅にかかってしまったり、参加者数減少など問題も多い。

こういった行事の資金は、市からの補助と、自治会の会費と寄付金でまかなっているが、行事によっては、小額ではあるが参加料をとっている(盆踊り、一人 100 円など)。しかし、村瀬さんの本意としては、参加料などのお金はとりたくないもので、他のところで節約してできるだけ無料で行いたいということだ。

また、苦労は行事に関することだけではない。最近、近くのコミュニティセンターを閉めることとなり、そこを利用していろいろな活動をしていた住民は、他のコミュニティセンターなどの施設に移らなければならなくなった。また、他の地域からもコミュニティセンターを利用しにくる人がおり、他にあるコミュニティセンターがいっぱいになってしまう。市は、公民館を使えなくなったことから、駅の施設を変わりに使うように指示したが、駅まで微妙な距離の加納東の住民にとっては、駅の施設は駐車場の問題などで非常に利用しにくいいため、「文化、芸能、体育、福祉を含んだ建物を加納校区へ！」と署名運動を行っている。

加納で改善したい点は、可能城跡にもっと人が来るようになって欲しいということ。加納城跡の堀を掘りなおして、その周りに梅の木を植えて桜と梅を楽しめる梅林公園のようにし、駐車場、歩道をつくり加納城跡をメインにウォーキングができるようにして人が集まってくるようになればよい、ということだ。

また、住みやすいということが一番であるから、歩道を作ったり、歩道橋をやめて信号をつくったりなどして、老人に優しい町になってほしいということであった。

加納東自治会の概要について

自治に入っている世帯 約 5 0 0 世帯 8 5 0 0 人 6 8 町 1 5 支部

加納東は行事が多い

1 4 月 4 月祭り

1 6 ~ 7 月 ホタル祭り

ホタルはホタルの会の人々が育てて行事に合わせて放している。

1 7 月 灯籠祭り

祭り自体は昔からあるのだが、実は灯籠を流すようになって 1 0 年もたっていない。

1 8 月 盆踊り

最近は集まりが悪いらしい。

1 9 月 敬老会

7 6 歳以上の人々が 9 0 0 人以上集まる大規模な行事。

1 1 0 月 体育祭

5 5 回を迎える行事で、自治会ではなく体育振興会が主催する。

1 1 0 月 中仙道ふるさと祭り

岐阜駅南口の完成をきっかけにできた祭りで、お城みこし、踊り、歌、フリーマーケットなどをする。岐阜市の補助が出る祭り。

1 1 0 月 市民文化祭

サークル発表会、個人発表会がある。

1 1 0 月注^{今年} ~~だ~~付 天満宮完成の祭り

今年だけのイベントで造り替えている天満宮が完成したらそれに合わせて開かれる。天満宮は大量の寄付金で造り替えられた。

1 1 月 成人式

1 2 月 節分祭り

1 3 月 歩け歩け運動

希望者 3 0 0 人ぐらいで梅林公園まで歩く。

これらの行事の費用は大体、自治会の年会費で行われている。

普段の行事について、ボランティアで消防団、水防団が手伝ってくれるので、人手不足には困っていない。

・ ホタルについて。

ホタル祭りは今年で 7 年目になる祭りで、もともとは、ロータリークラブの人が加納の為に何かやりたいと、考えた祭りである。今ではホタルの会というのがあって、4 0 人ぐらいの人が参加している。そのホタルの会の人々が、ホタルを育てて、祭りにあわせて川に放す。この行事には市からも少し助成金が出るらしい。

(6) 中山道加納宿文化保存会の活動：佐藤哲雄会長

■ 中山道加納宿文化保存会の概要

設立 昭和 53 (1978) 年

会費 1000 円 (その他文部省から 60 万円、市から 10 万円、ロータリーなどから補助)

会員 650 人

役員 20 人 (本当に歴史が好きな人の集まり)

背景 明治 24 年の震災や昭和 20 年の空襲、そして昭和 15 年の岐阜市との合併によって加納町の歴史書等が紛失してしまった。唯一残ったのが加納町史のみ。歴史の残る加納の保存をしたいということから創立される。始めは町内・自治会の 20 名ほどで開始。

ステッカー 「中山道加納宿文化保存委員会」(70 円) の会員シール。これがはってある家を訪ねれば資料がもらえたり、話が聞けたりする。とても好評。

広報誌 1000 部程発行。県図書・市図書・県・役所・中山道 16 宿から欲しいという声がある。市の広報より民間の広報の方が良くできていると評されている。

■ 活動内容

岐阜市があまりにも文化保存活動をしてくれない為、保存会が会費等から地図・案内板・説明板などを設置している。最近になりようやく岐阜市も小さな案内板などを設置してくれるようになったがまだまだわずかなもの。

- ・和宮の記念碑 皇女和宮が宿泊したとされる本陣跡にその記念碑を建てた。和宮の為に菊石・赤石の硬くて一番いいものを探し、国島さんから提供していただく。石には和宮の歌 2000 ~ 3000 の中から選んで彫られる。その出来には宮内庁も満足し手紙をいただいた。そして、県から感謝状も送られるほどの出来の良さである。式典には町内・自治会の人に参加した。
- ・奥平信正と亀姫の追悼・供養 奥平信正 (3/14)、亀姫 (5/27) の命日に行われる。その後座談会を開いている。加納だけでなく口コミで全国から人が来る。
- ・中山道ふるさとまつり 盆踊り。その歌曲は始め雅楽だったが、終戦わる。最近また雅楽を復元させた。江戸期に謡われていた後洋楽に変歌曲をお年寄りの伝え聞きを基にし、歌詞は加納町史からひろう。 H.2 当時の楽譜が発見されるがほぼ復元したものと変わらなかった。この歌は天満宮改築後や祭りで伝統の歌として披露される。
- ・加納やぐら太鼓
- ・文化財公開 「寒山捨取図・六祖図」。光国寺所蔵。国宝級。加納城おかかえ絵師、宗眼重信作
- ・資料発見 天正 12 年 小牧・長久手の戦い中の 6/7 に竹鼻城が水攻めされた翌日 6/8、秀吉が墨俣でお茶会をした。そのお茶会の資料が発見された。茶会記の原書は、京都裏千家の松浦家にある。
- ・地図 保存会が自身で作成した。これは普通の人には配れないくらいの需要があった。このことから、中山道が書いてある観光マップが市で用意されていない事に問題があるといえる。

- ・ライオンにまたがった少年像 奥平氏が長篠の戦いで使った「獅子奮迅」という言葉から出来たもの。500人で武田を抑えたことを讃えて作られた。もともと大分の中津城にあったものを昭和30年に岐阜に持ってきた。これを加納に置こうとしたが自衛隊があり置けず、県営グラウンドに置かれた。しかし岐阜国体の時に邪魔だからと壊されそうになったが、市長に保存会が頼み加納に置いてもらうことになった。その後、岐阜駅南口に置こうとするがロータリーに木があり置けなかった為置けず、今も尚加納の本丸跡の東側住宅地にある。この像の台に書かれている言葉は佐藤さんが考えたものだそう。

■ 加納藩と岐阜市

始めは10万石と大きかった。しかしM.4位に磐城平藩（福島）に取られ出し、末期には3万石になっていた。このうち1万石程は河内（大阪）にあった。明治に岐阜市が合併する際、上加納（柳ヶ瀬）も合併される。そして、岐阜市と中山道を結びつけた「荒田町通り」が出来た。この荒田町通りは市場で栄えたが、市場が取られて廃れてしまった。そして今度は岐阜大学付属病院も移転してしまう。

今、加納を見てみると、あれほどまでに大きかった藩であったのに、岐阜市との合併で影が薄くなってしまったと思える。人口も昭和35年の35000人をピークにして減少の一途を辿り、現在ではその頃の半分程となってしまった。また、加納は文教地区として多くの学校があったのだが、今ではほとんど吸い上げられてしまった。そんな状況下、岐阜大学付属小中学校は加納から動かさないという約束がされている。

■ これから

更に町の歴史を発掘して行きたいというお話でした。そして今後やっていきたい事に加納城の復元がある。それとともに二の丸跡に「すみやぐら」の復元をしたいと思っている。その為、二の丸跡はJRの土地なので買う必要があるのだが、岐阜市がお金を出してくれないので難しい。

また加納の整備として、ほたるの里やさくら広場を作っていきたい。3000坪程の土地があり、野外イベントがいつでも出来るようにという願いからだ。そして、加納の歴史資料や書類等が置ける資料館があるといいと思っている。

（7）住民の意見：杉岡滋夫さん

杉岡さんは、昭和16生まれ、加納にずっと住んでいる。幼稚園から高校までは岐阜に通学し、岐阜とともに歩んできた。ぎふまちづくりセンターの会員と同時に中山道加納宿文化保存会のメンバーでもあり、多くの活動に参加されている。個人で「四季のたより」という誌を書かれており、自然が好きだという。

加納宿は、中山道美濃16宿の中で最大であり、同時に城下町でもあった。昭和15年に岐阜市と合併し、「岐阜市加納」として現在に至っている。現在でも町名で奥平、長井などが残っているが、昔加納藩を治めた人物に由来している。岐阜女子師範附属小（現岐大附属小）などがあり、文教地区と呼ばれているが、今の住民にはそういう意識はないみたいである。個人的に加納は好きで、住みやすいと思っている。加納や岐阜市に関することをいくつか伺

い、4つに大きく分類してみた。

まず1つめは、ご自身が所属されている中山道加納宿文化保存会と岐阜市について。史跡の石碑や案内は、ほとんど保存会が設置し、岐阜市のものはほとんどない。市のガイドマップには専ら岐阜城、長良川鵜飼が載っていて、『中山道に冷たい岐阜市』という言葉さえある。県は祭りの際結構援助してくれている。そのため、古い人たちの中には岐阜市との合併は「ダメされた」意識がある人がいる。吸収される側には期待と不安の両方がある。行政側にはたくさんやって欲しいことがある。保存会が主でやるべきではない。具体的には、加納を重視して欲しいということ。昔の確執というのか、市の人は加納に来たがらないとおっしゃっていた。

次に2つめは、現在の加納について。加納西地区は市議会議員が2~3人いるのに対し、東地区は0で、発言権がない。例えるなら、東はプライドが高いがおっとりして、抜けているところがある「長男」、西はたくましさがある「次男」だそうである。西は元々商地域で、校下の活動も活発である。また、現在校下で行われている事業や構想については、立派な広場が完成した南口はJR岐阜駅の玄関口であり、近く为天満公園の辺りは大規模な整備がされていて、大きく変わるらしい。加納桜道の歩道橋も撤去し、横断歩道と信号が付く。名鉄の高架化とそれに伴う区画整理事業がどうなるかが最大の注目である。加納城跡周辺では、遊具を撤去して堀を掘り返したり、お城を再建したり、聾学校が移転して盲学校と統合したりするという構想がある。

続いて3つめは、昔を偲ばせるスポット等について。個々の事例なので、ここだけは箇条書きにする。

- ・和宮が書いた歌が宮内庁で見つかり、借りてきてそっくりの字体で彫らせた石碑が本陣跡に置かれている。
- ・宿場内にある「問屋」は「といや」と読み、人馬の引継ぎ所。江戸や京に発送する鮎寿司の品質チェックをしていた。
- ・沿道松は、鬼門除けのために川手城から見た辰巳（北東）の方角に設置された。加納城は鬼門除けのために八幡神社がある。
- ・安藤広重の中山道第69番目の宿として描かれている絵はぶたれ坊から見た加納城。
- ・加納は本陣、脇本陣の他に暫本陣まであり、大きい宿場町だった。
- ・現在では加納内に一里塚は残っていない。細畑の一里塚は全国的にも珍しく南北両方とも残っている。一里塚には枝が広がって木陰を作り、ちょっとした休憩所を演出する榎を植えた。民家への配慮のため枝は切られてしまうことが多い。絶滅危惧種のオオムラサキは榎の葉を食べる。
- ・茅の輪くぐりの儀式は、加納では襖（みそぎ）といわれ、6月30日に氏神様である加納天満宮で行われる。罪・穢（けが）れが祓われるという。
- ・上記の茅の輪など、加納には伝統行事が残っていて、特に夏にお祭りが多い。
- ・ほぼ各町にある秋葉神社の赤い石は岐阜城の石垣を持ってきたらしい。
- ・西方寺は、川端康成が加納天満宮でフラれたという彼女の実家である。
- ・宿場町の真ん中は道がまっすぐで交通しやすくし、端は鉤道にして敵が攻めにくいように作った。

そして 4 つめに杉岡さん自身のポリシーについて。二者択一ではなく、歴史的なものは残す、またそのことを住民がどう思うか、などについて保存会とお手伝いしてあげたい。個人としては「できる範囲で」ボランティアとして郷土に貢献したい、ということから各種活動をされている。その際、資料、史料も大事だがやはり現地・現場主義。自分の足で歩いて、しかもただ歩くのではなくガイドブックにはないものを発見すること。それと清規三事【実践躬行 整研教理 道心堅固】を自己のポリシーにされている。

(8) 行政の取り組み (1) 都市景観ウォッチング

岐阜市では、都市景観ウォッチングを毎年実施している。平成 9 - 10 年度は岐阜市役所周辺、平成 11 - 12 年度は金華地区、平成 13 年度は岐阜駅北口周辺、そして、平成 14 年度は加納地区で行った。

加納地区は、城下町の古い町並みが残っている一方、岐阜駅に隣接するエリアである。このウォッチングで街の現状をみつめ、地域の個性を活かしたこれからの景観まちづくりについて考えるために実施した。

実施方法：一般参加者、地元案内者、岐阜市役所、まちづくりセンター、学生で 10 数名からなるグループを 4 つ作り、それぞれ下の 4 つのルートで加納地区を見て歩きながら、景観に関して気づいた点を記録し、グループごとに報告する。

- ・ A グループ：加納城東回りルート ・ B グループ：加納城西回りルート
- ・ C グループ：中仙道東回りルート ・ D グループ：中仙道東回りルート

各グループの報告

A グループの報告：・岐阜らしい建物が見当たらず、岐阜らしさが欠けている。

- ・ 加納城の中に入っても、城跡らしさが感じられない。
- ・ 古い家の前と緑の景観がマッチしていない。

etc

B グループの報告：・清水緑地、再開発計画に期待。

- ・ 門前町の雰囲気が良い。
- ・ マンションと周辺の調和を。

etc

C グループの報告：・県庁都市としての岐阜の駅前が貧弱。

- ・ 住民が町の清掃に気を使っている。
- ・ 旧跡が多い、案内看板もあるが、点で終わっている。次に行くところへの案内がない。

etc

D グループの報告：・加納小学校の前の「加納の赤門」を保存して欲しい。

- ・ 大手門前の場所は、現在駐車場。歩道橋下に案内看板があってよく見えない。
- ・ 新町の江戸時代からの水路、丸石のまま残したい。

etc

主な場所について出された意見

JR 南口周辺の再開発の現状について

- ・ 昔に比べて岐阜駅が明るくなった。
- ・ 今の公園も工夫して整備されていると思うが、木や草をもう少しはっきりすると、より人が集まって休める場所になるのではないかと思う。

etc

清水川・天満公園の整備や、地元での取り組みについて

- ・ いこいの場みたいな感じで癒される。
- ・ 清水川の歩道、カンなどがあった。ゴミ箱をなしにして、皆が持ち帰る徹底を。

etc

中山道加納宿の一帯について

- ・一部建物が残っているが、道標、説明版による説明がないのが残念。歴史の遺物がやや少ない。
- ・全体的に、「いかにも中山道だ」と感じるようなものがなかった気がした。言われれば気づくけど、せっかく残すなら、もう少し雰囲気や名残があるといい気がした。

etc

加納城跡やその周辺のこれからの整備について

- ・石垣の中が一面芝生になっていて、そこで遊ぶ人たちがいる風景はいいなあと思います。でも、お城が少しも残ってないのがさみしい気がした。
- ・南市民会館、青年会館の解体を計画通り実施して、整備の第一歩を進めて欲しい。

etc

・参加者のアンケートから

- ・岐阜で生まれ岐阜に在住しながら知らないことが多すぎた。普段何となく車で通っていた道が、こんなに意味深い深い道とは知らなかった。特に加納城跡かいわいを大切にしてもらいたい。
- ・城跡、水路など、地元の人による説明があってよかった。

etc

次回に向けた課題

景観ウォッチングを他の行政の事業とも連動させる内容にしたほうが効果的になる。

ウォッチングの範囲を狭めて、もっとじっくり丹念に見てもいい。

ウォッチング中の撮影は、使いきりカメラやデジカメのスライドにしたほうがよい

グループ間での見解の一致・相違点の確認、議論できる会が持てるとよい。

(9) 行政の取り組み (2)

岐阜市教育委員会 社会教育 文化財グループ 内堀氏 横田氏
まちづくり事業室 野々村氏

岐阜市は東海地方で2番目に大きい都市。加納は都心部の中でも重要な地域である。歴史を活かすためのまちづくりを進めている。

【加納地区における歴史的資産】

- ・徳川家康築城による「国史跡加納城跡」
- ・近世交通の主要軸であった中山道、美濃十六宿で唯一の城下町でもあった「加納宿」
- ・加納城南東に位置する「川手城」

【地区全体としての整備課題】

歴史的環境にふさわしいまちづくりを推進する

歴史地区としての魅力をつくりだす

歴史的ストックを掘り出し活用を図る

地区内における交通渋滞や通過交通の進入を解消する



【整備課題に対する対応方法】

- 地区全体の将来まちづくりの目標を明確化する
- 歴史的環境保全と活用を図っていく
- 歩行者ネットワークを創出する
- 都市の骨格となる街路樹を整備する

【実現化へ向けての検討】

行政サイドが果たすべき役割

- ・加納城跡及び、史跡等の保全活用整備への史跡指定拡大を視野に入れた取り組み <教育委員会>
- ・旧中山道等の歴史的みちすじや商店街通り、まちかど広場等の整備 <歴みち事業>
- ・清水川や新荒田川等の散策空間整備 <河川事業>
- ・交流拠点整備や案内板、サイン整備による地区内散策の誘導 <まち総事業>
- ・市民のまちづくり活動の支援 <まち総事業>
- ・市民のまちづくり活動の支援 <まち総事業>
- ・地区景観形成のための取り組み <景観条例 地区計画等>

市民サイドの果たすべき役割

- ・まちづくり市民協議会の発展的活動

まちづくり市民協議会については、整備後のまち育ての中心としての役割を担っている。

市役所の方から伺った話

「加納はなかなか話が進まない。岐阜町と加納町の昔からの関係で、住民は行政的な中心地であったことに自負している。まちづくりに対する考え方は、岐阜駅北側とは違う考え方

をもっているようだ。分かっている上で行政的には後回しになってきた。歴史に詳しい一部の年配には一種のライバル意識のようなものはあるらしい。『岐阜町の方が先』こんな話はだいぶ聞いてきた。今もあるかは分からないが、あることはある。」

「住民の意向を踏まえたまちづくりを進めている。」

「地域住民に意識調査のためにアンケートを実施した。まちなか歩きと道路の調査をした。」

「まちづくりに対する視点がここ 10 年～20 年くらいで変わってきた。具体的には、再開発により短期間で賑わいを取り戻すことから、それよりは岐阜の歴史を生かす方向へ変わってきた。」

「岐阜市はユニークな立地である。東日本と西日本の接点。平野と山地の接点でもある。2つの世界の接点であるからこそ、文化にも良く現れてきている。」

「加納城については復元するかどうか決まっていらない。むしろ、復元する気はない。ここが一番の論点であることは分かっている。平成 13 年に加納復元の理念をつくっただけ。」

「加納城の整備についてはやっと基本構想ができたところである。市役所の整備事業は上から言われて作るものではない。地域の人たちと材料を出し合って方向性を作っていけばいい。住民からは、お城の必要性はないとの声が多い。」

「加納城をどういう形で整備して行けばいいのか模索中。」

まとめ

お話を聞いて、加納の町には想像以上の歴史的由来があり、また文化財がある事を感じた。しかしその歴史を十分に保存出来ていないことや今ではその名残さえ感じられなくなっている現状を保存会の方々はもどかしく思っているようだった。保存会が出来ることを一つ一つ行ってはいるがまだまだ行すべき事はたくさんあるようだ。また、それに対し加納の歴史に対する岐阜市の対応の悪さを知り、もう少し駅南にも目を向けてもいいのではないかなと思った。実際加納の町を歩いた時岐阜市教育委員会による案内板等に比べて、保存会による案内板等の方が数が多く、規模も大きかった。

保存会のみなさんの残そうとしている、加納は歴史を見ても十分残す価値があると思う。多くの人に周知してもらえ、岐阜の新たな見所としての加納になるといいと考える。

おわりに

まちづくりというものの大変さを、今回、加納を見ることで理解することが出来た。加納はお城まであって歴史的にとっても貴重な面がいくつもあるにもかかわらず、まちにその面影や雰囲気は実際のところ分かりづらい。そもそもある程度加納を知っていると思っていた私

だったが、歴史、例えば中山道の宿場町であったことなど、があるとは思っていなかった。

まちづくりは行政のするもの、と漠然と思っていた。まちづくりをするには相当なお金を要するし、近隣住民の同意を得なければ進まなかったりとすべき事が多く、行政という大きな強制力がなければ成し得ないものと考えていたからである。しかし、加納の文化財保存会を始めとする行政ではない、市民の力、で加納は少しずつ加納らしい町になっているのだと感じた。行政が動かないから知らない、ではなく、行政に任せっきりにしない自分たちの手によるまちづくり。私はこの力の大きさを関心せずにはいられなかった。と同時に、加納の町のこの先に大きく期待をした。

ヒアリング後、中日新聞に以下の記事が掲載されていた。

中日新聞より

江戸初期に築城された岐阜市の加納城跡で、「天下一」と刻印された瓦一枚が初めて発見されたことが十六日、市教委の発掘調査で新たに明らかになった。「天下一」の称号は、仙台城（仙台市）の石垣や大阪府内で出土した赤絵の大皿などで見つかっているが、瓦は珍しいという。同城は、関ヶ原の合戦直後の西国をにらむ重要な戦略拠点として徳川家康が造らせたとされ、市教委は、城の位置づけを現す貴重な資料として詳しい調査を行う考えだ。

市教委は「一点しか出ていないのは、別のところで使われた瓦を持ち込んだことも考えられる」としつつ、「禁令が出ている以上、造られた時代がほぼ絞り込める。築城当時の瓦の可能性がある」（内堀信雄文化財グループリーダー）。今後、この瓦を手がかりに、“謎”が多い加納城の解明に迫りたいという。

また、この日は発掘現場を一般公開し、歴史ファンら約七十人が発掘状況を熱心に見学した。（参考 中日新聞より引用）

加納の今は年々高齢化が進み、いろいろと問題もある。その中で「みち再生事業」についていろいろと調べてみた。加納の町は昔中山道が通っていて今もその名残があちこちで見られる。その中で、加納西にあるアピタと加納西小の周りの道への問題点と解決策、加納西の今後を本で調べたり人に聞いたりして考えてみた。

- ・ 松井逸朗さんのプロフィール

加納西地区は世帯数 3,456 世帯であり、人口 8,929 人である。そのなかで 83 の町内会、12 の支部に分けて構成されている。自治会の加入率は 90 % に近い。

・現在の活動状況における問題点

- 1．自治会の会長決めにおいて、やる人がいなくていやいや年配の方がやっている。フットワークやIT関係に不安が生じる。
- 2．町内会（自治会）の集まりの参加率が、各場所でまばらである。
- 3．避難訓練において、現在参加している人は比較的健康であり、ほんとうに訓練が必要な高齢者や障害者の方が参加できていない。

・松井さんの考えとこれからの課題、方向性

・安心して暮らせる町とはどんな町なのか？答えのひとつとして、住んでいる住民が参加して、全員で自分たちのことを考えていける町がいいのではないかな。そのために、全体としてではなく、町内会単位で関わりを増やしていく。そのなかでの仲間意識を高めることにより、いざというときの人数確認などをしやすくする。

・第一のステップとして、町内会ごとに避難場所を設定する。その避難場所に町内会のみんなが集まることで、仲間意識を高める。すべても基礎を町内会単位で行う。その結果として、いざというときにスムーズにまわりの人と対応できる利点ができる。

・各町内会で避難場所を決めたら、全体のマップを作り、加納西全体のことを把握できるように、目立つような場所に貼り出す。

・現在の加納西自治会の加入率は 90%と非常に高い。なによりも自治会に入ってもらうことが第一となる。自治会加入の勤め方の例としては、新しくマンションを建てるにはさまざまな問題が生じるが、自治会は反対しない。その代わり、オーナーさんをお願いをして、マンションの入居者に自治会に入ってもらえるよう協力してもらう。などがある。

・そのほかにしていることとしては、生ごみの問題や0歳児、保育にあたる幼少の子供をもつ親のために、自治会で集まる場として公民館を提供し、情報交換などをして問題の解決に役立ててもらっている。

・まとめ、考察

今回自治会の連合会会長である松井さんの話を聞かせていただいた内容では、現在の加納西自治会は、たいした問題もなく加入率も高くいい感じである。先代のみなさんがつちかってきたことを維持しつつ、新たな問題点を見つめなおしていく方針であることがわかった。自治会の加入率が90%をこえていること自体がとてもすばらしいことであるので、それを生かし近隣の住民同士のコミュニケーションをどれだけ深めていけるかが重要なこととなる。そのために、地区で行う祭りを活性化させるなど、住民がすすんで参加したくなるような催しを数多く開き、地区間でおこっていることを住民全員が把握できるように、情報交換の場を町内会が提供していくことが必要となってくるだろう。今の時代が近隣住民との関わりを少なくしていつているなかで、改めて関わりあうことの大切さを認識していけるような自治会を目指してほしいと思う。

（2）加納のアピタとその周辺地域との関わりについて

アピタとは「アピス タスカ」というギリシャ語（いい物の源泉）から作った造語である。

加納のアピタができるにあたっては、地域の方々と意見を交わしあい、普通のスーパーとは違う一ランク上の店として「ユニー株式会社 アピタ岐阜店」ができた。売り場面積は 4656 坪で、従業員数は約 450 人である。当時、地域としてはユニーと同じようなスーパー主体の店はいない、ということだった。そこで 1994 年にユニーとアピタが合体して大型店としてのアピタが名古屋港南店と同時に岐阜店も営業を開始した。そのアピタは衣料や住居関連の面でグレード・アップしており、名古屋港南店も岐阜店もかなりの客入りで繁盛した。岐阜店は駐車場も約 1200 台のスペースがあったが、当時は周りの道に渋滞が起こるほどであった。スーパーからのグレード・アップのため、ユニー直営店が 8 割を占める中、残りの面積をテナントとして場所を貸した専門店がある。またイタリアのデザイナーを呼んで設計してもらっており、赤と黄色の奇抜なデザインで加納に大きく存在している。そして、周りにも大型店ができ始め競争が激しくなり、駐車場は 900 弱になり、売り上げも当時に比べたら減っているのが現状である。

地域とのかかわりもいろいろとある。

1. 地元の学生の職場体験の受け入れをしている。

去年も岐阜聾学校、羽島高校、近隣の中学などをあわせ、20 校弱の受け入れをしている。

2. 納税署の窓口の設置

3. 赤十字献血センターが年に 4 回、客を対象として来る。

4. 募金を募り社会福祉事務所へ献金している。

5. 介護実習を受け入れ、老人や障害者の方に対しては優先して受け入れ態勢を作っている。

6. このくらい的大型店には珍しく町内会にも入っている。

7. 地元の公共団体のイベントに対して、ポスター協力をしたり援助金をだしている。

8. 加納商友会の会合に出席している。

しかし、立地場所からいって、客は地元の方や車での来客がメインとなる。そこで交通の面について聞いてみたところやはり問題点はあった。

1. 元は工業用地であるため店舗と駐車場の間に一般公道がはしっており移動面でも安全面でも客に迷惑をかけている。

2. アピタの東側にある神明町通りである。この通りは、アピタの西側をはしる岐阜西通りの迂回路になっていて、交通量が多くなっている。ただ抜け道なので道路も広くなく、飛び出しもあるため危険である。

3. アピタの南の城南通りが歩行者道路の幅が狭く危険である。

4. 駐輪場はあるのだが、店に近いということでアピタに隣接する一般公道に駐車する人が多く迷惑となっている。

5. アピタと駐車場の間にある一般公道に路上駐車をする人がいて、駐車場と店を行き交う人に非常に迷惑になっているうえ車で通る人にも危険をあたえている。これについては、一ヶ月に 1, 2 件程苦情がでていて、店側も対策を考えているとのことだ。

6. 駐車場と店を行き来するのに通る道は一般公道のためテントを上には張ることができずお客に迷惑をかけている、

7. 横断歩道が少なくお客は大体横断歩道のないところを横断するため、危険らしい。

このような交通の面の問題を解決するためいろいろと対策を考え、みち再生事業を通して話あっている。

まず、店と駐車場を行き来する人に安全を提供するため、駐車場と店の間でお客が一番利用している場所に横断歩道を作を考えている。次にアピタと駐車場の間に路上駐車をする人に対しての対策はポールを設置することで路上駐車ができないようにしようと計画している。またアピタの東の神明町通りについては一方通行規制も検討中である。

いま近くにある加納小学校の周りには一方通行規制のあるところが3つあるが神明町通りは、朝は北から南、夕方は南から北へ、通勤ラッシュと会社帰りの人たちの抜け道となっているためその時間の交通量が増え、登下校する子供達には特に危ない通りとなっている。そのためこの神明町通りを完全にどちらかの一方通行にしてみようと、地元の人と話し合っている。

このように加納のアピタは、地元の人とのコミュニケーションを大事にしていって、お客に迷惑をかけないようにいろいろと改善すべき問題を見つけている。お客に安心と満足を提供し、地元とのつながりを大事にして、今後のよりよい発展を期待したい。

(3) 加納西コミュニティについてのまとめ

加納の今抱えている交通についての問題を考えるために、いろいろな人に話を聞き、資料を調べた。その結果特にアピタ周辺の地域では交通量が非常に多いわりに一方通行規制が入り組んでおり、歩行者・自転車・車のすべてにおいて危険を感じていることがわかった。特に加納神明町通りでの人々の不安が多数であり、なるべく早いうちの解決策を考える必要がある。加納町は昔から道路の町といわれているように、くもの巣のようにたくさんの道路がひかれている。ただでさえわかりにくい道路を通行しやすくするために、標識の明確化や道路の拡幅化、地域住民に対する道路を通行する際の危険性の確認などを行う必要がある。そうしたことが、加納のまちづくりにつながっていく。まずは現在における交通問題を解決しつつ、まちの活性化にむけ駅前広場の整備や交通ターミナル機能の強化をはかり、良好な都市景観の実現を図るとともに賑わいのある交流空間に創出を目指していきたい。また加納地区には歴史環境が日常生活の一部として都市の中にとけこんでいる地域であり、こうした多彩な歴史資源を次世代に継承していけるようなまちづくりをすすめていくことが、加納西コミュニティの活性化につながっていくはずである。

第 7 章 加納の和傘産業の現状とこれから

1. 加納傘の歴史

(1) 加納傘の起源

加納傘の起源として考えられているのは 2 つの説があり、

寛永 16 年(1639)播州明石藩主戸田丹波守光重(7 万石)が加納城に移封された時、一緒に明石から傘屋金右衛門一家をつれ、傘張りを始めさせた(文化 2 年〔1805〕6 月の久運寺留書の記事より)。金右衛門が加納にきたという事実はあるがそれが直接に傘産業を興したとはまだ傘が一般庶民には使用禁止されていたので家中の需要に応ずるのみで商品として製造販売されなく、あまり需要がなく発達したとは考えられにくい。

宝暦 6 年(1756)永井伊賀守尚陳が加納に移封されたとき、わずか 3 万 2 千石と 10 万石の城下町にとって財政が苦しく、家臣たちは生きていくために、“武士は食わねど高楊子” といって生活は苦しいが武士は内職が許された時代ではなかったので、目立たない内職として傘骨削り、轆轤作りに従事し、また藩主の奨励が出たことにより地場産業として確立していった。また永井氏の時代、天保年間(1781～88)には都会で傘の需要が高まってきた時代で産業として伸びた時期と思われる。

は藩主の移封にあたり、城下の商工業者が従われるのは通例のことで、その中で金右衛門と一緒に来たのもありえることであり、この金右衛門が加納傘の祖の一人ともいえるかもしれない。そして久運寺過去帳には初代金右衛門から 3 代目まではっきりと傘屋長次郎父と記されている。しかしこの金右衛門が傘を産業として発達させたかどうかは不明である。また戸田氏は 7 万石といえども領地はだいが輪中地帯にあり度々災害にあい、財政が苦しかったと考えられる。

これからすると、戸田氏が移封された頃は加納傘の起源の一端が見えてくるが産業として成立するほどではなかった。一方、永井氏の頃は傘の需要が増え、藩の奨励も受け、産業として成立する基礎が確実に積みあがってきたと考えられ、寛永の歴史的起源と宝暦の産業的起源の 2 つがあるといえる。

(2) 江戸積(江戸への出荷)、傘販売統制のはじまり

傘の生産は本格化し、武士は傘骨削り、轆轤作り、柄竹作りなどをし、加納町民・農閑期の農民は傘張り、仕上げをするといった分業体制が生れてきた。

文政 9 年(1826)には宮田吉左衛門(江戸積酒造家で宿老)と、森孫作(脇本陣の年寄)が加納藩より領分傘問屋を申し付けた。財政難に悩む藩役人が、城下の傘作りに専売制を実施し、江戸積産業を育成して、その利益を回収しようとしたのである。

文政 9 年「傘荷物江戸積帳」によると、

これまで当地の製造業者より仲買人によって販売されていたのを、領内産傘を一手に買い取り、販路拡大をはかる。

江戸積をするために、下り傘問屋及び、桑名の廻船問屋と引き受け方を交渉する。積荷方法を考え、運賃は 1 個(傘 40 本入り)につき、銀 3 匁で、江戸問屋の蔵敷口銭は代金の 5%であった。また加納～江戸の運搬日数は最短 29 日、最長 96 日、平均 51.6 日を要した。

江戸問屋の手引きで大坂からの下り傘とその送り籠を取り寄せ、江戸市場向けに品質改

良、価格低廉に製品を研究する。

代金決済のため、江戸藩邸へ為替を取り組み、江戸向きに統制をした。江戸問屋の仕切り金は伊坂十兵衛のところに集められ、宮田から為替手形によって外桜田の藩邸役人が受領していた。

この統制は全体で年間 5 万本を超えていったが長くは続かなかったようである。

江戸積については従来仲買人制度の頃から行われており、統制の時期に始まったものではない。また桑名の回漕店から東海道沿岸を東下して江戸霊岸島に陸揚げしたのである。桑名までは加納長刀堀会所からの出荷を通例としたが、時期によっては大野や鏡島湊から出荷した。

(3) 傘札(藩札)の登場

加納傘の生産量は年々増えていき、安政 6 年(1859)4 月の「加納領傘棧留出来数取調帳」によると、傘生産者が加納町内に 35 人で、主な販路は業界上位の 3 業者は江戸、京都など遠隔地へ出荷しているが、他の業者は岐阜・名古屋など近辺に出荷している。生産量は 7 万 5 千本の業者から 600 本の業者と幅はあるが加納町内だけで計 49 万 1380 本を生産している。また近在村、3 ヶ村には 3 人おり、岐阜・名古屋・関・上有知・笠松・大垣に販路があり、計 1 万 5900 本の実生産量がある。そして加納近辺の合計で 50 万 7280 本、代金にして 1 万 2707 両をあげている。

この調査と同時期に、宮田吉左衛門、森孫作は領内生産傘の一手販売についての願書を出している。藩札を発行し、仲買に仕入れ金として貸し付けることが計画された。傘問屋が考えた新しい専売仕法の原案は次のようであった。

1 匁と 5 分の傘札を発行し、問屋が無利息で拝借する。(金 1 両につき銀 64 匁替え)

傘荷物取引は従来どおり仲買に任せ、傘札に正金(現金)を交えて問屋から前金に貸し渡す。

傘屋冥加は 10 本につき銀 3 分。問屋冥加は江戸積利益の半分を出し、江戸表傘代金は「御上様御為替」とする。(冥加... 営業許可の納税として割り当てられた献金)

傘札引き換え金を集めるため講から取立て、その寄金分だけで、傘札の発行をし、評価を高める。(講... 一種の組合で、講 1 口につき 5 両を集め、藩札引換準備金にした。講には常盤講、末広講などがある)

仲買の間で年行司を立て出荷量の報告、冥加金の徴収、傘札引換所の取調べなどを行う。

領主側が職人の抜け売り、家中内職者及び町方職人の不実を厳しく取り締まる。

こうした両人の意見書と、財政難の藩は生産量増大の打開策として安政 7 年(1860)、1 万両の藩札を幕府の許可を受け発行し、5 年間で消却する予定をした。宮田吉左衛門を切手引換所、松波菊太郎・森孫作・三宅甫三郎を引換取締役とした。

発行されたものはまず、同年 3 月に《傘 1 本札(額面：銀 2 匁)》と、《糸 15 匁札(額面：銀 1 匁)》の 2 種であった。傘屋には 60 日限り、正金を返すことを条件とし、常盤講へ 29 両 2 分、末広講へ 70 両 2 分が貸し渡された。町へもお触れが出され 4 月には東下川手村が 30 両を借りた。

傘札発行から 5 ヶ月目の万延元年(1860)7 月、傘専売制の強化策が藩から打ち出された。

傘問屋を産物会所と改め、傘を全量買い上げる。

支払いは、傘と引き換えに 1 本につき銀 2 匁 5 分(正金・藩札半分ずつ)を仮支払いし、先方売り上げ、仕切りによって精勘定する。(藩札分は 60 日目に正金と引換が出来る)即金渡しの冥加として銀を若干差し出す

これに対し、傘問屋は

江戸積は傘の種類によって元値段を定め、即金を貸し渡し江戸仕切りの上差額を受ける。冥加は傘 10 本につき銀 3 分を上納。岐阜行きの品についても職人より 3 分ずつ冥加を上納する。

京・大坂・江州その他当国所々売り分は、小口であるから荷主・買い手の相対取引として、会所で「改」印を受け冥加を納める。

加納問屋は講中傘屋以外と取引をしない。

このように万延 2 年(1861)5 月 7 日産物会所が開設され、傘を製造したものは多少に関わらず会所へ届出をし、送り状に「改」印を受けて自分で売りさばくか、会所の買い上げを申し出る。そして傘屋より下職へ鑑札を渡し取り締まり、傘・糸札は産物会所引き受けとするお触書がでた。

加納藩藩札一覧

藩札名	銀高	発行枚数	銀額
傘二本札	4 匁	9050 枚	36 貫 200 匁
傘一本札	2 匁	165472	330 貫 944 匁
糸札	1 匁	19200	19 貫 200 匁
轆轤三札	3 分	19767	5 貫 930 匁 1 分
轆轤二札	2 分	19630	3 貫 926 匁
小計		233119	396 貫 200 匁 1 分
銭 100 紋札		12601	

(4) 傘仲間の増大

元治元年(1864)6 月、それまで末広講、常盤講、日の出講に分かれていた傘仲間を統合し、「傘屋仲間株」を結成した。その規定には、

株金は 1 口 5 両、これを藩に預け年 1 割の利子を株仲間へ下附される。

冥加金として年に 100 両ずつ上納する代わり、臨時御用金は免除される。

株所持者の諸国売買は自由だが、下職が自分で他へ売りにいくことや、無株傘職の製品売買、下職の召抱えを厳重に取り締まる。

岐阜下職人からも運上を徴収する。(運上... 工商や運送貨物にかけた税金)

これにより、傘職取締は、各町頭に傘職の実態を調査させ、「惣町傘下職調帳」を製作して取り締まりを徹底した。それまでは傘職と下職は資本を有する傘職、その傘職から委託されて生産工程の一部を担う下職という関係であった。しかし傘職も自分で工場を持ち、張りや仕上げなどをしていたし、下職も委託品だけでなく、自己製品をこしらえその所属する傘職へ自由に売り払い、白張傘を他所へ売り捌いたり、白張傘を油引き、渡世のものへ廻して仕上げ、産物会所へ無届で売却するものもいた。

こうした下職の自由な行動は傘屋仲間株の成立や傘職から出される鑑札によって厳しく制限を受け、禁止され、主家も固定されて、従属関係はさらに厳しくなった。

幕末になると山本紋衛門という手先が器用な人が現れ、独特の技術を有し、骨、張りの新案

を出し、蛇の目傘に「山」印を入れ、移出し、細身の傘で特に山本傘と称して有名になった。松葉骨は山者本人の創意であるといわれているし、同家中の坪内国助の創意でもあると両方かかっている。

(5) 近代・明治時代に入って

明治維新の後、加納藩主と重役は東京へ移住したが、一般武士はほとんど残り、傘生産に従事した武士も多く残った。

明治 5 年(1872)ころには、上加納の中村源之助が絵日傘を神戸のイギリス商人と取引し、杉山新七は小型の絵日傘を製造して海外輸出を試み、この年、年間 150 万本の生産を記録している。

明治 12 年(1879)には、オーストラリアのシドニーで万国博覧会が開催され、加納の赤塚源次郎が加納傘 13 種を出品し、海外進出の基礎を築きあげた。

明治 14 年(1881)4 月、赤塚源三郎、加藤治平、松井文、渋谷利三郎、赤塚源八らにより「加納製傘商会」創立され、製品の標準化、販路拡大(海外進出)をはかり、入脱退者を繰り返していたが商会は明治 24 年(1891)10 月の濃尾震災により事業上の失敗を起こし、手形の濫発等によって結成 10 年で解散してしまった。

製傘商会ができて 5 年後の明治 19 年(1886)岐阜知事宛てに「美濃傘問屋組合設立要望書」が提出され、杉山新七、宮島利三郎、矢野佐七、中村源之助、加藤治平、赤塚源八、遠藤セツ他 1 名が発起人となり、製品の規格統制、粗製濫造の防止、傘の改良、販路拡大を目的とした「美濃傘問屋組合」を設立した。そしてこの組合規約は後に続く傘に関する組合の基礎となっている。

また東海道線開通により、従来より、輸送時間の短縮、運賃の軽減、包装堅固などの企業利益からほとんどの業者が水運に代わり製品輸送に鉄道を使うようになり、東京が主な取引先だったが、他府県の直接販売に成功し、北は北海道、南は宮城県まで京阪神地方にも直接販売を拡張していった。

明治 36 年(1903)第 5 回国内勸業博覧会が大阪で開催される時、加納傘問屋から多数出品をし、加納傘の精美にして安価であるため飛ぶように傘が売れ、それ以降も出展をし、加納傘は 1 日 1 万本から 2 万本へと著しく増加した。

明治 42 年(1909)統制による向上発展の気運が高まり、加納を中心とする「岐阜県傘同業者組合」が組織され、明治 43 年(1910)3 月 25 日に発足した。この組合は先の美濃傘問屋組合と目的は同じで、時代を組し、加納傘の規格統一、品質改良、販路の統制を図り、傘業の進歩発展をするものであった。価格の協定は組合の性格上行わないが、製品検査制度を確立した。しかし、自由競争的な活躍に歯止めをかけることができず、最初は力を発揮していたものが年を経るごとに徹底せず、有名無実になってしまった。

(6) 大正時代の賑わい、戦中の統制、そして戦後

大正元年(1912)、大阪の松坂屋で傘の原価を無視し、「特價 2 円の傘を半値 1 円に廉売する」という宣伝が出され、傘は多くの一般大衆の目を引き、同様のことを三越、大丸でも行い、さらに京都、東京にまで波及した。しかしこの様な事態は都市の傘小売店に直ちに大影響を与え、それが問屋、製造元にまで問題が波及し、資本のある百貨店の乱売防止を試みた

が容易に解決ができなかった。さらに悪いことに、廉売つまり安価に傘が売られたことで安っぽい粗製品であるように思われ、実際粗製品が周り、評判が悪くなった。

昭和に入り、当時の岐阜県和傘同業者組合の会長だった赤塚源八は県当局の熱心な助力を得て、取引上の欠陥、製品、業界の改良善、回復をし、時代の波に乗り工業組合法に基づき、同業組合を解散させ、和傘製造業者の結束を図り、強力な統制力をもつ法人格を生み出すため昭和 10 年（1935）「岐阜県傘工業組合」を誕生させた。まず組合は第 1 の使命である製品改良に目標を置き、製品検査と原材料の検査を励行し、原材料の一部を共同購入、指導・研究のための品評会、優良、永年勤続者の表彰を行った。そして組合員の家庭に組織事業を認識させるために婦人会も結成し、着実に進展していったが、諸事情により、昭和 24 年（1949）以降、任意の組合が休業という形で機能を果たさなくなり消滅した。

戦時中には、傘も統制品に入り（一部の高級な切り継ぎ傘は伝統を残すためにはずされたが買う人がおらず、切り継ぎ職人は減った）、原材料の購入配給に関して強力な機関が必要となり、また全国的に統括する連合会設置の要求が起こり、昭和 15 年（1940）岐阜市加納を中心とする「日本和傘工業組合連合会」を発足させ、理事長に岐阜市の宮島助三郎が就任した。この連合会の目的は、利益増進と和傘改良で、検査・取り締まり、統制、営業に必要なものの供給を事業として行った。

統制についていうと、原材料の使用数量の制限及び原料の共同購入の強制が強いられ、まずはじめに傘用油（乾性油；荏油、亜麻油、麻油が主流）は特殊用途のため特に力を入れた。次に澱粉（糊）、そして傘紙の配給割り当ての取り決めを行った。

昭和 18 年（1943）には統制組合法は施行され、商工省は新たに従来の工業組合を改組すると共に、別個に「和傘卸商業組合」を設置して販売機構をこれによって統制した。岐阜県においては主だった各工程の工業組合ができた。

昭和 20 年（1945）日本は敗戦し、終戦を迎えた。昭和 21 年（1946）全国和傘統制組合は解散し、代わって「全国和傘工業組合」が生まれ、県内には昭和 23 年（1948）「岐阜県和傘工業協同組合」、「美濃和傘商工業協同組合」が誕生したがまもなく解散した。

その後は洋傘の普及、交通機関の発達、生活様式の変化により和傘の需要は物資不足だった戦争直後の昭和 23～25 年をピークに急激に落ち込み、昭和 30 年（1955）には洋傘の生産と和傘の生産が逆転してしまった。そして加納傘業界においてわずかに傘骨製造業界で組合が存続しただけで全体としての組合が長い間なかったが、昭和 61 年（1986 年）春に「岐阜和傘振興会」が発足し、現在 6 業者が加盟をしている。

岐阜県和傘生産

年度	製造戸数（戸）	雨傘価格（円）	日傘価格（円）	計（円）
昭和 6 年	2184	3841893	420930	4262823
昭和 7 年	1634	3054398	403672	3458070
昭和 8 年	1862	3441450	313584	3755034
昭和 9 年	2003	2813356	323093	3136449
昭和 10 年	2123	3645629	415347	4060976

県内各地方別 加納町は岐阜市郊外で稲葉郡に属す（昭和 10 年度）

	製造戸数(戸)	雨傘価格(円)	日傘価格(円)	計(円)
稲葉郡	1639	2078415	322310	2400725
岐阜市	107	1402500	90000	1492500
羽島郡	103	51074	180	51254
大垣市	18	23600	2857	26457
他の 16 郡	256	89980	2857	92837
計	2123	3645569	418204	4063773

2. 和傘企業の現状

(1) 藤沢商店

現在自社では 15 人、飛騨の河合村を入れて 17 人程度の従業員が働いている。納期は 2 ヶ月くらいかかり、1 回のロット数は 25～50 本程度と数は少なくなり、季節性に関係して需要の波はあったが今ではあまり変化はないということである。流通経路は東京・大阪の間屋でそこからデパート、小売店へと流れていく。岐阜では小売ができる場所がなく直接傘を買いにくる人もおり小売店がないことも問題であるという。

30 年位前から海外と取引を始め、まず台湾で始めて、ここの技術は日本と同じ中節の作り方で蛇の目傘を生産していたが、人件費がかさむようになり輸入のメリットがなくなり 7,8 年やった後に中国へと移っていった。中国では福建省で傘製造者を集めた工場の中に和傘チームを 1 つ作りそこで生産した。(そのとき中節の技術は中国様式であったが、日本様式に替えると余計ややこしくなるためそのまま中国様式で生産した。)しかし契約が守られず、信用ができなくなったため、拙江省杭州市の 50km くらい山奥に入った山間部で、傘を作るようになった。(杭州市と岐阜市は 1979.2.21 友好都市提携を結んでいる)ここでは安い傘をつくり年中仕事があり、傘のモデルチェンジがないため安く傘ができる。問題としては良い竹が手に入らないことである。海外取引をしているのは高級品から安物の傘までまんべんなくないと傘は売れず、そこで安い傘を中国で作ることにしたのである。

戦後和傘の需要は減り、残す手立てとしてクリスマスツリーの形をした傘や、ツリーのデコレーション用など海外向けに販売して職人の工賃アップや好調な売り上げになり、工場を移転するまでになったが、ドルショック(1971)により売れ行きが悪くなり和傘に戻るようになった。

行政との関係については鳥取の淀江市、長野の喬木村はふるさと創生資金などを使い行政が支援をしているが、岐阜では生産者側は残そうとやっているがなかなか本腰を入れてやってくれず、また傘の展示場所や伝承館のような“和傘道場”なるものを作り和傘を紹介する施設を作ってほしいがそれには行政の力が必要となる。しかしそういう動きを見せてくれないので行政は当てにはならない。

今後について和傘は本来の実用意義はほとんどなくなってしまったが、和傘がないとできない伝統行事や舞踊はまだ必要としているのでそういう人たちがいることがわかりやめることは簡単だが続けている。後継者については工場のことは工場の人が後を継ぎ、職人については今工場内で傘張りをやっている人がおり、その人たちに任せられるようにしていく。今度、工場を改造して骨削りも工場内でできるようにし傘の工程を見学できるようにしていく

ことも考えられているそうである。

(2) 平野商店

会社の経緯

もともとは京都に店を構えていたが、昭和 5 年ごろに岐阜に引っ越してきて、今現在で 4 代目になる。ご主人は大学を卒業したが、いろいろな理由から家を継ぐことになり、今は商店を一人でやっており、職人に諸材料を持っていく外注加工と完成品の検品をして傘の出荷の準備をしている。販売先は主に東京、大阪の履物や呉服屋へ納め、在庫が出ないように生産数を決めている。生産は洋傘の登場により和傘は押され、景気の波に乗り最近はまだ悪くなってきた。

また同業者とは助け合うために昔は講を組んでいたが、今では親睦の意味で毎月 6 日に集まっている。

今後について

手作りで和傘をさらに増やしていくことはもうできないので、良い製品を作り高級品として和傘を残していきたいと、また職人の高齢化については 30 代、40 代の人に内職を今頼んでやってもらっており、少しは先に延ばすことができている。

新商品の開発については大企業のように新作の試作品の予算をつけることができないのでむづかしい。最近では日傘の紙で新作を業者から持っては来たが、模様継ぎの柄の新作はお金がかかりなかなか新作の話はこない。

行政からは助成金等をもらいたい、陶磁器のように誰が作ったかはっきりわかるものではなく、和傘は多くの人が携わって出るので全面的協力をしてくれない。また和傘道場(仮)については場所、傘を教える人、教える順番などを決めることが難しいと思われるので道場を作るときもそういう内部の点も考慮して作らなければならない。博物館的なものでなくても、中学生を対象に夏に講習会を開くなど公的機関での紹介をできる場を増やし、継続していきたいし、そういう場だけでなく傘屋が成立するよう職人や得意先、さらには傘を使う人がいなければならない。

(3) 村瀬商店

これまでの経歴

村瀬さんの父親は傘屋だったが、村瀬さん自身は跡を継ぐ気は全く無く、現在の県立岐阜商業を卒業した後、昭和 8 年に十六銀行に就職して銀行員として働いていた。その後しばらくして太平洋戦争が始まった。戦時中には徴兵され、一時は海外にも出兵していたが、昭和 18 年、現在の加納城跡にあった師団に入り、そのまま終戦を迎えた。

戦後、何もやることがなくなってしまった村瀬さんは仕方なく親の跡を継ぎ、傘屋の仕事を始めた。その仕事は北関東を中心として傘を売って歩くというものだった。その後、昭和 52 年に現在の場所に店を構えるようになった。最盛期には月に 2,000 本ほど卸していたが、洋傘の普及や職人の高齢化などにより次第に衰退していき、現在では店を閉めるための整理を始められている状態である。

製造・生産の分業構造

傘骨については、もとは 3 軒の職人さんに頼んでいたが、現在では北長森の方に依頼して

いる。ロクロは長屋木工さんに頼んでいて、そこで繰込みもやってもらっている。紙は美濃の五十川製紙、丸重製紙から購入している。繋ぎは加藤さんという 92 歳のおばあさんに依頼している。この人がやめてしまったら他に頼めるところがないので、もう傘の仕事は終わりにしようと考えている。傘骨に紙を張る「張り屋」という専門の職人さんがいたのだが、最近では「張り屋」はほとんどおらず、村瀬さんが自ら仕事をしている。昔は仕上げは 3 軒ぐらいに仕事を出していたが、生産量が減ったり、職人さんが高齢になってやめられたり、亡くなったりしたため、現在では石川さん 1 軒だけに仕事を出している。

現在の状況

最盛期にはかなりの生産量があったようだが、最近では職人さんが高齢化してやめられたり、亡くなったりして仕事がほとんど出せず、去年からやめたも同然の状態で月に 100 本も卸していない。村瀬さんは後継者を作っておらず、先にも述べたように、すでに店をたたむために整理を始めており、今は手元にあるだけの材料でできるところまでやろうとしている状態である。86 歳にもなるのにまだまだお元気で、未だに自ら車を運転して材料を運ぶこともしているだけに、やめられるということは非常にもったいなく残念に思う。

和傘の今後について

加納の和傘は後継者作りに失敗してしまったので衰退する一方だ。自分のところも誰かに継いでもらうつもりがなかったのが後継者を育ててこなかった。それに材料も手に入りにくくなってきているということもあり、今、手元にある材料が無くなったらそのまま廃業するだけだ。職人さんについても、昔は加納の住人の約 8 割が和傘の仕事をしていて、隣の人も向かいの人も和傘を作っていたが皆やめてしまった。他に職人を探そうとしても当てがいない。

このように和傘は衰退してしまったが、できることなら体の動く限り和傘の仕事を続けて和傘という伝統を残してはいきたい。しかし残念ながら仕事をしてくれる職人さんがいなくなってしまったのでこれではどうしようもない。

(4) 汲田商店

これまでの経歴

汲田さんのお父さんが傘の仕事をしていたため、子供の頃から傘に触れてきた。中学 1 年生のとき父親が死亡したために母が仕事を引き継いだ。が、どうも仕事ははかどらず、手先が器用だった汲田さんはよく手伝いをしていた。

中学卒業後、親は上の学校に行って勉強するように言ったが、汲田さん自身は勉強よりも傘作りをするほうが向いていると思い、本格的に傘作りをはじめた。21 歳のとき大恐慌が起こりお得意さんが 2 軒つぶれ路頭にまよう。銀行に金を借りに行ったところ、その係長が給料の 1 年分を貸してくれたので、その金で再び傘を作り始める。

昭和 39 年に東京オリンピックが行われたことで外国人が多数来日した。そのお土産として和傘 1 万本という依頼がきた(3 ヶ月以内という期限付き)。本来なら到底無理な話だが、その当時かなり在庫が残っていたため、これを絶好のチャンスと考え必死に働き、なんとかできあがった。これによってかなり儲けることができた。それに加えて再び日本人にも和傘が知られるようになり、徐々に和傘産業は盛り返していった。

昭和 47～48 年ごろは 1 年程ビニール傘を作っていた。(ちなみに、初めてビニール傘を作

ったのは汲田さんだそうである。) ビニール傘の生産はそれなりの結果を出しており、さあこれからという時にオイルショックが起こり、傘が作れなくなり駄目になってしまった。

その後は洋傘の普及が大きく影響して、和傘の値段は 1/3 から 1/4 に暴落していく。平成 12 年には 2 つあった工場をつぶしてしまった。今では 10 数量の狭い部屋で高く売れることよりも芸術性を重視して仕事をしている。

現在の分業状況

- ・傘骨は岐阜に 2 軒ある骨屋のうちの 1 軒に依頼している。傘骨を作る技術は難しく、かなり本腰を入れて、それなりの覚悟を持って取り組まなければ技術は身につかないので、今の若者にはおそらくやろうとする者が現れず、骨屋はなくなってしまう可能性がある。そうしたら藤沢さんのように自分のところで作るしかなく方法がなくなってしまうだろう。

- ・最近では切り継ぎの仕事を自分でやっている。その作品のひとつがアクティブ G に展示してある。(白地に燕と柳の模様) 繋ぎの仕事はそれなりの経験が必要で手間がかかる。今は 90 歳の人に頼んでいる。

- ・張りの仕事は 91 歳のおばあさんに頼んでいる。

- ・紙は美濃の製糸工場の物を使用。最近は真剣に紙すきをしている人がおらず、質のよい紙ができないので、手すきの紙を使うことは少ない。

- ・仕上げの仕事は自分でやっている。しかし、工場が狭く仕事がしにくい環境になってしまったという問題がある。今では全盛期の 1/10 ~ 1/20 の生産量しかなく、月に 3 ~ 4 日しか干せなかったりする。当然生活するだけの儲けにはならず、これまでの蓄えで生活している。

- ・飾り屋、かがり屋、付属付屋の仕事は素人でもできる作業であるが、外注に出せるほどの量が無いので家でやっている。

和傘の今後について

現在では明らかに和傘の必要性は薄れ、生産量も減り、職人さんもどんどん減っている。例えば、1 軒の漆屋に 3 軒の間屋から依頼があるというケースもある。このように和傘生産は行き止まりになりつつあり、先行きは真っ暗な状況である。

汲田さん自身、和傘という伝統はできるなら残していきたいと考えてはいるが、しかし現在の社会状況では腹をくくって、覚悟を決めて取り組むような人はいない。あまり悲観的なことは言えないが現実には...。今後、頼む職人がいなくなったら自分でやらなければならないだろう。やらなければ廃業するだけである。

(5) 阪井田永吉本店

経歴と現在の生産状況

大正の終わり頃に柳津出身の祖父 - 阪井田永吉氏が開業し、昭和 38 年、父の代で会社組織になり、昭和 43 年には加納駅前に作業場を移転した。1 ドル 360 円の時代に海外輸出していた時期もある。仕事の手伝いを始めたのは高校生の頃、本格的に始めたのは 23 歳になってから。

昔は人が多く外注が主であった。しかし年々規模が縮小し、職人は減る一方である。ポイント、ポイントで職人が不在なので製造がストップしてしまうこともある。仕方なく阪井田さん自身が作業すること多い。阪井田本店では今現在 5 人が働いている。アルバイトの内の 2 人は紙張りの能力はある。1 本の傘を作るのに順調に流れれば 1 ヶ月程度かかる。

販売ルート

京都と東京の間屋に流している。岐阜の傘を知っている人が直接買いに訪れることもある。岐阜市にはちゃんとした和傘の販売店がない。販売するからにはそれなりに傘が売れなければならないので、傘問屋が協力して出店するのは難しい。

分業

傘骨 - 下請けに出している。骨染めや横もみは職人さんが不在のため骨屋自身、阪井田さん自身がやっている。3件骨屋さんがあって取引している。筑後にも優秀な骨屋さんがいたが不幸があってやめられている。

柄竹、ロクロ、繰込 - 長屋木工に依頼。

紙 - 美濃や四国から調達。紙染め屋はまだ1人健在。紙選り・紙継ぎは阪井田さん自身でやっているが紙継ぎはとても手間がかかる。

繋ぎ - 職人さんと阪井田さんがそれぞれやっている。

張り、仕上げ、付属品付け - 外注。仕上げは兼松さんに依頼しており、阪井田さんは兼松さんとの取引関係が強い。絵は下絵がないので難しい。一人いた職人さんも目を悪くされて引退している。現在は掛け軸などの分野で絵を描いてくれる人を探している状態である。

和傘の現状と未来について

台湾の傘を買ったことはあるが、中国に仕事を出したことはない。海外に仕事を出すのは、自分たちの首を絞めているのと同じことだ。単価はなかなか上げることはできない。「中国製でもいいんじゃないか」という風になってしまうことが怖い。

職人が減り、自分のところで仕事をすることも多い。ロクロなど数が少なければ何とかできるが、骨は難しい。常に触っていないと平均的に上手なものができない。いったん違う分業をやって、骨作りをやってもうまいかない。職人が減り続けていけば存続が難しくなるかもしれない。

できるのなら和傘を日本に残していきたい。失くしたくはないが不安がある。傘作りに興味をもっている若い人もいるが、忘れ去られたら本当に消えていってしまう。何か対策を考えてあげなければならない。

(6) 兼松商店

父親の代からはじめ、加納長刀堀、茜部をへて現在の鶉へ昭和53年に引っ越した。茜部にいたころは共同者がおり、職人も24、5人いたが、父親の死により共同者が辞めることになって職人が困るということで、自分が会社をやめて引き継いだ。昭和51年にはコマーシャルが撮られ、日本民間放送連盟賞最優秀賞を取った。

現在は家の前で傘を干し、販売先はほとんど東京で、他に京都へと出しており、月平均で100~200本生産しているが、天候、職人の材料の仕上がり具合などにより波があるという。そのため注文が来ても納期が決まりにくく、このようなことは他の業種では考えられない。今後は同業者が増えることはなく、骨の仕上がり具合が悪くても文句を言ったらやめられてしまうし、業者が競争できるほど数がなく、寄り合いのようになってきたのでこだわりや良い傘を仕上げるのが難しくなってきたし、造っている人がほとんど一緒なので付属品の違いぐらいでしか差がなくなってきた。

後継者については前に若い人に教えたことがあるが熱心に覚えることができなかったし、

定年退職して昔傘張りをやったことがある人に頼んだこともあるが、リズムに乗ってやることができずあてにならないとのことであった。後継者を育てるには相当の我慢と仕事自体がお金にならないなどあせらないことが大変だと言っていた。途中、アルバイトで給料制にしてやってもらっていたことがあったが傘の単価が高くてついてしまい、半完成品を四国から買うこともあった。今ではお土産用や間に合わせ用なら中国製品で十分で、傘を買うだけでなく、傘を買う問屋もどれがよい傘かを見分けられる人が少なくなっている。おとしには傘屋をやめるという話があったが、周囲から続けるように励ましを受けて現在も続けている。

3. 和傘産業振興への行政の取り組み

(1) 薮下氏（元岐阜市歴史博物館）

氏の経歴

大学時代考古学専攻で卒業後に文化係学芸員になる。その後、加納傘の仕事をされていた宮島さんといっしょに和傘の研究を始める。宮島さんが亡くなったあとも宮島さんの遺言で調査を続けた。博物館で企画展を行ったり、アメリカの学芸員と調査をしてニューヨークのど真ん中で開かれた和傘展にも関わっている。

自称「日本一の和傘研究者」である（2番目の人がいないからだそうである）。

和傘の現状について

岐阜の和傘の産業としての再生は 100%ありえない。なぜなら和傘は提灯などとは違いバリエーションがない、それに大量に生産する力も販売する力もない。アパレル産業と同じで、海外生産などをして海外に食われている。観光地のお土産の和傘はたいていが中国産である。また洋傘のほうが手入れが楽で、軽くて安価なため押されるのは当然で。時代の流れには逆らえない。生き残るには伝統工芸の高級和傘としてしか生き残れないのではないかな。あるいは和服とセットで1本 5 万から 10 万で売り出すなど、需要を確保して完全注文生産にすることなどが対策としてある。

行政が本腰をいれなければ和傘は生き残れない。和傘に接するコーナー、和傘会館などの施設の設立は簡単にできるが、管理・運営などその維持が大変である。それをどうカバーしていくか。行政は次の世代までつづけるのを延ばすだけである。

前述のニューヨーク展では、外国の方から「日本人はもっと伝統文化に目を向けるべきだ」という類の反響があった。それ以前にも岐阜市民はもっと傘を大事にし、そして興味を持たなければいけない。なぜなら傘は戦後の岐阜を支えた大事な産業だったのだから。

各地の和傘の状況

岩手・花巻 - お土産のミニ傘を作っている。実物の二分の一の大きさで、手作りの同じ技術で製造されている。一本 3,000 円くらい。

山形 - 傘の裏に浮世絵

東京・青梅 - 番傘

鳥取 - 祭り傘（阪井田商店と取引がある）

淀江 - 伝承館

長野 - 保存会で活動し、技術を残している。

群馬・前橋 - 一軒あったが 12～13 年前につぶれている。

山口・萩 - 萩焼の窯元のひとつが傘作りをしている。

近頃は和傘の部品のロクロが不足している。これらの地方の傘屋は岐阜の業者から仕入れている。今現在、一貫して多様な和傘を生産できる産地は岐阜だけである。

後継者問題

なぜ後継者が育たないのか？いくつか理由がある。一つ目に、自分の名前で売り出せないことが挙げられる。陶器のような伝統工芸なら自分の名前で売り出し、成功すれば高額で売り出せるが、傘は基本的に分業であるためこれが不可能なのである。二つ目にサラリーマンより収入が少ないことである。傘を張るのが上手な人が一本張って 700～800 円である。月 200 本から 300 本張っても 20 万から 30 万の収入にしかないのである。これを解決するには会社組織にして職人を社員、歩合制から月給制にして賃金を保証しなければならない。しかしこれも需要が不安定な業界では難しい。

藪下氏の考え方とこれからの活動

和傘を伝統工芸、心のふるさととして突っ込む気はまったくない。「必要があれば残る。必要なくなれば消えてゆく。廃れるものは廃れる。」心のふるさとなどといった今の風潮はノスタルジアでしかない。極端な話、歌舞伎などで使う傘も和傘でなければいけないのか？雰囲気だけなら洋傘でもいいのではないのか？実際に洋傘の描かれた浮世絵もある。これからは和傘の研究をしてどうなるのか、数十年後どうあったらいいのか、ということに深く突っ込みたい。

一度日本をまわり残っている和傘産地を調べ、さらに和傘のルーツをたどって中近東にも行きたい。戦後、和傘についてまとまった本はない、宮島さんとの約束もあるので、それらをまとめた集大成の本を出したい。

(2) 岐阜市の取組み

岐阜市の行政の側での伝統産業の担当は、商工観光部地域産業振興室であり、また文化振興の視点から岐阜市教育文化振興事業団もグラフィックデザインを取り入れた和傘展の開催に取り組んできた。

まず産業振興の方から見ると、県の郷土工芸品の指定を受けている業種は、提灯、和傘、渋うちわ、油紙・のぼり鯉の4業種である。和傘については岐阜市和傘振興会が発足して当初は12社が加盟していたが、現在は5社となっており次第に減ってきている。市役所や文化センターなどにも岐阜市の伝統産業として和傘がそれぞれ展示されているが、販売の場所もなく、問い合わせがあった場合に企業を紹介しているにとどまっている。

和傘展の方は、もともと市民芸術祭の一環として市教育文化振興事業団が主体となって地元デザイナーの育成の支援のためにグラフィックデザイン展と観光ポスターの作成を行ってきたが、岐阜ならではのものをということで2001年度は和傘を使って36人のデザイナーに作品を依頼することが企画され、事業団が主体となって実行委員会が組織され、和傘企業も参加した。和紙の上でのコンピュータ出力などに課題はあったが、手書きと半々のかたちでアクティブGで展示会が行われ、好評を博した。2002年度も市のブラッシュアップ事業の一つとしてこの事業は継続された。今年度は提灯を使うことも検討されたが、残念ながら中止となっている。

また、岐阜市歴史博物館では、一般及び中学生を対象とした和傘の作成講座を実施している。

岐阜市としては、産業振興政策と文化事業からそれぞれ進められてきている。あかりフェスタやスローライフ推進事業などの取組みも行われてきたが、これまで以上にまちづくりの視点からの連携が求められる。

(5) 日本国内の和傘の産地（インターネットより） 岐阜県を除く

都県名	傘名	製作者(店名)	特徴・その他
岩手	花巻傘	滝田信夫(滝田工房)	1801 年頃、肥後熊本土族の千葉左近が流浪し糊口のため花巻で傘の製法をし、この地方の下級武士に広まったのが始まり。最盛期には製造業者 48 軒、職人 68 人、年産 30 万本の花巻物産の一つであったが昭和 38 年に滝田工芸のみとなった。 滝田工芸は大正元年、重茂光郎より独立し、今では 3 代目。製造品は蛇の目傘・番傘・踊り傘・ミニ傘・壁掛け傘。壁掛け傘づくりは体験できる。
山形		古内清一郎 清司	19 世紀、水野藩の奨励で下級武士が始め、東北一の生産額があった。最盛期には 1 00 軒を超える業者がいたが。今では古内家のみとなり、親子 2 人で伝統を受け継いでいる。 特徴として大きさが 2 寸と一般より大きく、松葉状の小骨の先端を持っている。オリジナルの浮世絵傘が自慢。注文生産で、注文が多いのは旅館から。
千葉	佐原傘	佐伯達雄	昭和 60 年、千葉県指定伝統的工芸品に指定される。
東京 青梅市	青梅傘	根岸子之助	原産地として適切で江戸との交流が盛んであったため発達した。明治時代には付近と合わせて 700 本近くあったとされ、だいたい所沢市から八王子市にかけて使われていた。
長野	阿島傘	菅沼善治	江戸時代中期、飯田下伊那地方を治めていた知久氏の家臣が副業として製造し始めた。戦前の最盛期には約 100 軒の業者、年産 30 万本だったが今では 1 軒となった。 村政 115 周年を記念して作られた直径 6m の日本一の大きさを誇る和傘が阿島傘伝承館に置いてあり、工芸体験ができる。現在家族と職人さん数人で年産 3000 本作っている。

石川	金沢和傘	松田弘 (松田和傘店)	江戸時代後期の文政年間に職人が 80 人、明治 12 年には 180 人、明治大正期の最盛期には 118 軒の業者があり、戦後も 100 軒ほどあったが昭和 30 年頃生活様式の変化により販売量が減少し、現在では 1 人。 金沢和傘の特徴は孟宗竹を使い、紙は楮和紙を張っていること。堅固・優美・豪壮で風雪に耐えられるように傘の中心部に和傘を四重に張り、周辺部糸を二、三重張り破損しやすい部分を補強しており、他の和傘に比べて重め。 松田さんは提灯製造との兼業で注文生産により製造する。年産 200～300 本。
愛知	つまおり傘 端折長柄傘	尾関浩一 (尾関朱傘製作所)	昭和 53 年愛知県無形文化財に指定されており、神社・寺院の儀式祭典には必須の用具。一見通常の野点傘に見えるが、傘の端が下向きに曲げられた特有の形をしている。技法は約 390 年前から丹羽群扶桑町の尾関家に伝わり現在 14 代目。
京都	京和傘	西堀健作 江美子 (日吉屋)	京和傘の始まりは室町時代で、当時は朱塗りのものを作っていた。英エリザベス女王や故ダイアナ元皇太子妃来日の際、桂離宮や二条城にての茶席で使用。むかえにある宝鏡寺の境内で傘を広げ仕上げ作業をしている。
鳥取 淀江町	淀江傘	淀江傘伝承の会	文政 4 年(1821)、倉吉の倉吉屋周蔵が淀江に来て、傘屋を開いたのが始まり。明治 14 年に津山の西金蔵が傘製造の指導に招かれたのが淀江傘発展の糸口となった。大正には製造業者 71 軒、年産 17 万本に達し、西日本一帯に広がった。洋傘の普及で昭和 26,7 年をピークに廃業者が増え、昭和 59 年、高齢のため最後の製造業者も断念。昭和 60 年「淀江傘伝承の会」を発足させ、一度傘作りから離れた高野慶治氏を会長とし、平成 2 年には和傘伝承館が開館し、6 人が伝統を伝えている。年産 2000～2500 本作られ照明用の傘が 1000 本占める。 淀江傘が発展した理由としては日野川の流砂で堆積した砂浜が広く、一度に何千本の傘を干せたことと、竹材が入手しやすいところにある理由がある。

鳥取 鳥取市		竹扇堂	江戸時代後期からお盆の時期に鳥取市国府町に伝わる「因幡の傘踊り」という雨乞い踊りを一般向けにアレンジした「しゃんしゃん祭」がおこなわれている。傘の骨に鈴をつけ、ならして踊るのである。
香川	高松和傘	(有)太田商店 (有)傘清堂 三好寛明 真鍋照子 岡崎和子	明治 20 年、岐阜産の日傘を参考に作り始められたのが起源。手先の器用な讃岐の職人は手漉和紙と阿讃一帯で豊富に取れる竹林を使い製造した。
徳島	美馬和傘	中岡清(中岡和傘店)	昭和 30 年頃には美馬町に 200 軒あまりの和傘店があったが、現在では 2 軒にのみ作られている。月に 120～130 本製造。中岡さんは伝統工芸師の資格を持つ。
愛媛		泉正(泉和傘製作所)	最盛期には 15 軒の和傘製造業者があったが、洋傘の普及により現在では泉さんのみ。内子の竹と五十崎町の和紙を使用して作られている。 愛媛県総合科学博物館主催で小学生を中心に産業講座を開いている。(内子町は和ろうそくの方が有名。)
福岡	城島和傘 筑後和傘	城島和傘保存会	慶長 6 年(1601)、町内の宮司が内職を始めたのが始まりとされている。昭和 20 年代中頃には町内に 500 人以上の職人がいたといわれている。今では 1 人になり、後世に残そうと平成 6 年「城島和傘保存会」がまちづくりの一環として発足し、橋本さん夫婦と技術継承をしている。 材料は竹は岐阜県、和紙は地元の八女産、糊は蕨湖。 福岡県では城島町情報がない。
都県名		傘名など	
岩手		花巻傘	銀河系いわてブランド
山形		山形和傘	山形の伝統的工芸品
千葉		佐原和傘	千葉県指定伝統工芸品一覧 (ハローねっとジャパン千葉発)
東京江戸川区		和傘作り	東京の伝統工芸
石川		金沢和傘	石川のガイド
岐阜		岐阜和傘	岐阜県の郷土工芸品
京都		京和傘	常設展示場伝統工芸品 (京都伝統産業ふれあい館)
香川		高松和傘	香川県伝統的工芸品 (かがわ新事業サポートセンター産業情報課)
福岡		筑後和傘	福岡の伝統工芸品

県指定伝統工芸品リスト

；参考

石川県デジタル百工情報書府・百工比照 net

世界工芸エンサイクロペディア 工芸百科事典 県指定工芸品リンク集

<http://shofa.pref.ishikawa.jp/inpaku/encyclopesia-j/>

5. まとめ

加納の和傘の歴史は古ければ江戸時代初めごろで約 360 年前までさかのぼることができる。産業として傘が成り立ってくるとそれが藩の税収の一つとなるほど江戸時代には藩札である傘札も登場するようになった。明治時代にはイギリスやオーストラリアへと海外に紹介されます。和傘は広がっていったが、第二次世界大戦が終わり戦後の物資不足も解消され始めた昭和 30 年ごろから洋傘の登場で和傘は急激に落ち込みを見せ現在ではかつての面影が見えないほど衰退してしまった。そして現在和傘を取り扱っている問屋や話を聞きに 6 月～7 月にかけ、聞き取り調査をしにいったがその時もすでにもうやめる準備をしているところや、やめることを何回も迷ったところなどもうすでに傘では生活が成り立たない状況や伝統産業の高齢化を目の当たりにした。必要があれば残るし、なければなくなる。確かに和傘はそうなのかもしれないが、まだ日本の伝統行事で和傘が使われているのでただなくなっていくのを眺めているだけでもいけないものである。それに以前は岐阜市の税収すら支えた産業であるため傘を発展させていった先人たちに申し訳が立たないような気もする。

そこで和傘を今後どう残していくか自分なりに考えたときにある企業がおっしゃったような和傘道場(仮)なるものを造り、そこで伝統の公開をするのもいいし、さらにその道場を市民自ら運営ができるようにし、道場を建てる段階、またはその道場の必要性を問うところから市民参加ができれば伝承は引き継ぐことができると思う。しかしこの時ただ箱物を作るだけではそこに住んでいる人すら知らずに建物があるだけになってしまい、和傘に対する誇りみたいなものも何も生れてこず、さらには道場の経営悪化で失敗になるだけはどうしても避けたいものだ。建てるのは簡単だがそれを維持運営していくことの難しさ、それはほとんどの博物館、美術館などにいえることである。そして加納のまちづくりと連動させ和傘だけでやっていくのではなくなるべく多くのこととか係わりさせていく必要があると思う。もうひとつの方法として「“岐阜加納名産”和傘」と名前を売り出すには他と差別化ができるように製作者の名前を明らかにし日本で作られている伝統的な和傘を宣伝する方法を「骨製作者○○」、「轆轤製作者」、 「張り製作者□□」というふうに工程ごとに製造者の顔が見えるように表示をすればそのほうが手作り感がアップして、高価な値段になる理由や多くの人が関わりなければならぬ理由が消費者に伝わりやすくなると思う。陶磁器のように作者がはっきりしないのであまり若い人が寄り付かないといていたが多くの人と協力し合って作ることができる和傘づくりの魅力を出させるように売る方法がもっとあると思う。

私自身、加納が和傘の産地であったこと、加納自体何も知らなかった。調べていけば起源は古ければ約 360 年前になり岐阜が中心となれた産業の一つであったこともわかった。その傘が後継者不足や需要の低迷により長年続いてきた危機の真っ只中にある。現在岐阜市内には和傘が売られている小売店はないそうである。和傘の産地である岐阜市にすら置いておらずそれでどう和傘の伝統を守っていけばいいのかまた、守る必要があるのかすら疑問が浮かんできた。他県の和傘の動きを見ると、もう一つの都府県に一人づつぐらいしかおらず和傘の集積ができていけるのは可能だけである。加納の和傘がだめになれば和傘の伝統は日本から消えていくことになるのである。そのためにここで何か和傘に策をうっておく必要があると思うとともに、加納に住んでいる人や昔和傘に携わっていた人だけではないけれどもっと自分の地域に目を向けることをしたほうが良いと思った。

参考文献一覧

- 岐阜傘に関する調査研究，岡本精次・神馬仁太郎，1929，西濃印刷
- 加納町地理，岐阜縣女子師範學校附属小學校地理科研究部，1937（復刻版「加納町地理」）
- 傘の由来記 和傘の祖先を訪ねて，澤田喜一編，1948
- 岐阜県新誌 郷土新書 21，安藤万寿男，日本書院，1950
- 岐阜縣和傘の研究，調査資料第 1 集，十六銀行調査課，1952
- 岐阜の「傘」について，十六銀行經濟月報，1954 年 7 月号
- 岐阜県和洋傘工業の近況，十六銀行經濟月報，1964 年 2 月号
- 美濃の紙・ちょうちん・傘，森義一，地方史研究協議会『日本産業史大系 中部地方篇』，1960，東京大学出版会
- 岐阜加納傘の研究（1）（2），岡本秀昭，地域社会，3-2，4-1，1979
- 伝統工業，合田昭二，岐阜市史 現代編，1981
- 加納の和傘 - その歴史と仕組み - ，薮下浩，岐阜市歴史博物館研究紀要創刊号，1987
- シンポジウム「和傘の未来を語る」，薮下浩他，岐阜市歴史博物館研究紀要，9，1995
- 企画展 雨・雪・傘，岐阜市歴史博物館，1994
- 企画展 加納の和傘 岐阜市歴史博物館，1985
- 岐阜の和傘，市原信治，1995
- 濃飛見聞録 加納の和傘を支える人々，松田千晴，1988
- 和傘を支えた職人たち（1） - 切り継ぎ一代・野田四郎 - ，松田千晴，中山道加納宿 40 号，2002
- 和傘を支えた職人たち（2） - 竹を切って 40 年・真鍋商店 - ，松田千晴，中山道加納宿 41 号，2003
- 傘 和傘・パラソル・アンブレラ，INAX ギャラリー名古屋企画委員会，1995，INAX 出版
- Bamboo in Japan，Bess，Nancy Moore，2001，講談社インターナショナル
- 雨の情緒 和傘の世界，なごみ，1998 年 6 月号
- 江戸諸藩物産案内 岐阜和傘，サライ 10 月号
- 岐阜和傘の現状と未来，藤沢健一，
- 岐阜和傘の歴史，生活の設計，1997 年 12 月
- 伝統の技 岐阜の職人 和傘 マルト藤沢商店，A UN 9 号，2003
- 趣味の傘，藤沢健一
- 特集 和の美 和傘と唐紙 月間茶の間 2003 2003 年 6 月
- 美濃傘の職人たち 職場と QC 4 1995 平成 7 年 4 月 25 日
- 和傘・その優美な雨具，藤沢健一，竹文化振興協会 「竹」73，2000
- 加納町史・下，加納町史編纂所，1954
- 岐阜市史 通史編近世 岐阜市 1981 昭和 56 年
- 岐阜市市 通史編民俗 岐阜市 1977
- 岐阜県史 通史編 近世下，岐阜県，1972
- 史料に見る岐阜県の歴史 東京法令出版 1984 昭和 59 年
- 岐阜市史 資料（三）岐阜傘関係資料 片野温 1971 片野記念館
- わが町の歴史 岐阜，高牧実，文一総合出版，1980